白詩における「…できる」の意の「解」字について

柴　田　清　継

大阪公立大学人文学会　人文学論集　抜刷
第42集（2024年３月）

白詩における「…できる」の意の「解」字について

柴　田　清　継

はじめに

筆者は「解」の字の「…できる」という意味の助動詞としての用法に関心を覚え、この用法の「解」の字が比較的多く使われている『白氏文集』に着目し、明治書院新釈漢文大系の『白氏文集』記載の本文をテキストとして用例を拾い出し、その用法の詳細について検討してきた。その結果、自分なりにある程度の見通しが立ち、これに付随して自分なりの新たな知見めいたものも得られたので、それらを本誌のこの場を借りて発表させていただきたい。

実は、今回の作業を通して、テキストとして依拠した新釈漢文大系の『白氏文集』の訓読や通釈には、「解」の字の意味を十分に把捉できていないと察せられる個所が一定数あることも判明した。今後、より正確な解釈が追求されるよう期待するが、その際、本稿の記述も参考にしてもらえれば幸いである。

文中、書名は『』で、作品名は《》でそれぞれ括って示し、白居易の作品名には通行の作品番号を冠することにする。引用した詩句の後には、参考までに、その書き下し文を〔〕に入れて付する。

1.「解」と「能」

「…できる」という意味は、『漢語大詞典』第10巻p.1361からの「解」の字の条では、その26番目に取り上げられ、「能够；会」と説かれているが、この意味は13番目に取り上げられている「明白；理解」からの派生と考えていいだろう。ヨーロッパのラテン系言語で、「知っている、理解している」等の意味の動詞（フランス語なら savoir、イタリア語なら sapére、スペイン語なら saber、ポルトガル語なら saber）の後に不定法が来ると、「～することができる、～するすべを知っている」という意味になり、所変わって、朝鮮語でも「分かる、知っている」等の意味の動詞알다が、「動詞の語幹＋ㄹ（または을）수（「～する方法、仕方」の意）」に後接すると、「～することができる」の意

味になるのと同じように、このような意味の連関は、大げさに言えば、人類共通の普遍的な現象のようである。英語の learn に to が後接した場合の意味も、これらに通じるところがあると言えるだろう。

このように13番目と26番目は連接関係にあるから、当然のことながら、どちらにでも解せる文例が存在することになる。李白の《月下独酌》其一の「月既不解飲」が「～飲（む）を解せず」と読まれたり「飲むを解くせず」と読まれたりするのは、どちらの解釈をしても通じるからである。したがって、本稿の検討は、これら両義―「分かる」と「…できる」の連関も念頭に置いて行っていくことにする。

さて、『漢語大詞典』の当該箇所には、用例として晉の陶潛（365-427）、南朝梁の簡文帝（503-551）、上述の唐の李白の詩句などが挙げられている。陶潛のものは、肝心の「解」を他の字に作るテキストがあるので省くが、梁の簡文帝にその使用があることからして、遅くとも６世紀後半、すなわち白居易より200年以上前には、この用法が出現していたことが分かる。

挙げられている簡文帝の詩句は「風生解刺浪，氷深能捉船」〔風生じて　解(よ)く浪を刺し、氷深くして能く船を捉ふ〕（《棹歌行》）である。「解」と「能」とが互文表現として使われており、巨視的には「解」と「能」が同義語であることをここに看取することができる。

唐代に入ると、「解」と「能」による互文表現、すなわち対句が枚挙にいとまのないほど見られるようになるが、それは白詩ももちろん例外ではなく、0447《朱陳村詩》の「十歳解讀書，十五能屬文」〔十歳にして解く書を読み、十五にして能く文を属る〕等、７例見られる。0384《自詠》の「朱砂賤如土，不解燒為丹。玄鬢化成雪，未能休得官〔朱砂　賤(やす)きこと土の如きも、焼きて丹と為す解(あた)はず。玄鬢　化して雪と成るも、未だ官を休むる能はず〕などは、平仄が相反する「能」と「解」をうまく使い分けている。

それでは、助動詞としての「解」と「能」は完全に同義なのかと言えば、その答えは否と言わねばならないようである。この２字の用法を比較するには、「…できる」の意味の助動詞としてポピュラーな「能」の用法を把握し、「解」の用法をこれと対照するという方法で行えばいいと思ったのだが、管見の範囲内では、古漢語の「能」の用法について詳細に記述した資料が、我が国のものはもとより、中国のものにも見当たらなかった。「能」は現代漢語でも極めて使用頻度の高い語であり、且つ古今を通じて意味上の大きな変化があったようにも見受けられないため、研究の対象として意識されることがあまりなかったのかもしれない。

とはいえ、現代漢語の「能」については、その用法を記述した著作が存在するので、

筆者は一計を案じ、現代漢語の「能」と白詩の「能」、さらには白詩の「解」との用法上の対比ということを、ごく大雑把に行ってみたので、その結果を報告したい。現代漢語の「能」の意味・用法の記述として利用したのは、劉月華・潘文娯・故韡共著の『実用現代漢語語法』で、その中の「能愿动词」（助動詞）としての「能、能够」の「分述」の部分[1]である。６項目に分けて「分述」されており、その内訳は以下の六つである。①「表示主观上具有某种能力」（主体がある能力を持っていることを表す[2]）、②「表示具有某种客观条件」（ある客観的条件が揃っていることを表す）、③「表示情理上许可，多用于疑问句和否定句」（情理上許されることを表す。多くは疑問文や否定文において用いられる）、④「表示“准许”，多用于疑问句和否定句」（「許可」を表す。多くは疑問文や否定文において用いられる）、⑤「表示估计」（予測を表す）、⑥「表示善于做某事」（あることをするのがうまいことを表す）。以上のほかに、筆者独自に、現代漢語の「能」の用法として筆者に印象の深い「你（们）能不能～?」「你（们）能～吗?」といった、相手に何かを勧誘・依頼する用法も⑦として追加した。以上七分類に基づき、白詩中のすべての「能」字をチェックしてみたところ、いずれの用法も見られることが確認された。やはり、助動詞「能」の意味・用法には古今を通じて大きな変化がなかったことが確認されたと言える。もっとも、③と④の用法のものはごく少数ではあったが。

では、「解」の方はどうか。白詩中には③④⑤⑦の用法のものは見当たらなかった。逆に言えば、白詩では助動詞「解」は①②⑥のいずれかの意味で使われていることになる。また、「能」との互文表現のものは①と⑥の用法に集中していた。

このように見てくると、白詩における助動詞「解」の用法のテリトリーは「能」のそれに包摂されていることになるが、さらに子細に観察してみたところ、「解」の使われ方には一種の傾向・特色が看取できることに気づかされた。上記①の用法のうち、動植物も含めて、ある主体が一般のレベルよりも一段もしくは数段高い能力を具有しているとか、動植物なら、それらが人間並みの能力を具有しているというようなことを言う時に「解」が使われる傾向がある。例を挙げよう。2268-2《和雨中花二首》其二の「黄鸎解語憑君説」〔黄鸎　解く語る　君に憑みて説かしめん〕。2633《雙鸚鵡》の「若稱白家鸚鵡鳥，籠中兼合解吟詩」〔若し白家の鸚鵡鳥を称へんとならば、籠中　兼ねて合に解く詩を吟ずべし〕。この二つは、鳥が人間の言葉をしゃべることができたり、詩を吟ず

1 劉月華・潘文娯・胡韡共著『実用現代漢語語法』（外語教学与研究出版社、1983年）p.113。
2 上掲書前半の日本語訳である相原茂監訳、片山博美・守屋宏則・平井和之訳『現代中国語文法総覧（上）』（くろしお出版、1988年）の訳文（pp.157-158）を付する。以下同じ。

ることができたりという例である。一方、人間を主体とする例を挙げれば、2567《洛下諸客，就宅相送偶題西亭》の「僮僕解笙歌」〔僮僕　解く笙歌す〕がある。これは、差別的なニュアンスを含むものの、童僕ですら笙歌の演奏ができるというものである。2352《留題郡齋》の「更無一事移風俗，唯化州民解詠詩」〔更に一事として風俗を移す無く、唯だ州民を化して解く詩を詠ましめしのみ〕は、杭州刺史の任を終えるに当たり、作者が自嘲もしくは卑下をして、在任中の私の唯一の業績は州民に詩を詠む能力を身に着けさせたことだったというものである。

2．ある感情を抱くことを能力として表現する「解」

以上の数例では、問題とされている能力は、主として詩の吟詠とか笙歌の演奏のような言わば「行為」だったが、白詩にはある種の感情を抱くという心の動きも、能力として表現された例が一定数存在する。その中で圧倒的に多いのは「愛」する能力であり、そしてその場合に使われる助動詞は例外なく「解」である。例を挙げよう。0647《期李二十文畧・王十八質夫不至，獨宿仙遊寺》の「始知解愛山中宿，千萬人中無一人」〔始めて知る　解く山中に宿るを愛するは、千萬人中　一人も無きを〕。1127《畫木蓮花圖，寄元郎中》の「唯有詩人應解愛」〔唯だ詩人の応に解く愛すべき有るのみ〕。これは作者が元郎中に木蓮花の絵を描いて送る際に、詩人たる君だけは私が描いた花の美しさを愛することができるに違いないと言っているのである。あるものを愛することができるというのは、その情趣を味わうことのできるだけの精神的境地に達しているというような意味合いだと理解してよいと思われる[3]。1137《白槿花》の「使君只別羅敷面，爭解迴頭愛白花」〔使君は只だ羅敷の面を別つのみ、争でか解く頭を迴らして白花を愛せん〕は、刺史殿は美女の顔だけは見分けられても、白い槿花の美しさを愛することのできる境地には達しておられないでしょうとからかっているのである。2344《題石山人》の「除却餘杭白太守，何人更解愛君閑」〔餘杭の白太守を除却せば、何人（なんぴと）か更に解く君が閑を愛せん〕。これは、私よりももっと深くあなた（石山人）ののどかな暮らしぶりを愛することのできる境地に達している人はいないでしょうと、作者白居易が自負心を述べて

3 この詩句を馬元調本等は「唯有詩人能解愛」に作っており、これに拠った我が国の大典禅師はその著『詩家推敲』（寛政10年序）において、「能」に後接したこの「解」について「能ト同意ニ用ユ又連用ス」と述べ、その例証として本句を挙げている（巻之下28丁）。しかし、「能解…」となった場合も、両字の細かなニュアンスの差に基づき、「…の境地に達することができる」といった解釈をすべきだと筆者は考えている。

いるのである。2824《夜調琴憶崔少卿》の「何人解愛中徽上，秋思頭邊八九聲」〔何人(なんぴと)か解く愛せん　中徽[4]上、秋思の頭辺八九声〕。これは君のほかに、誰が中徽の辺りの音階の、《秋思》の曲の初めの方の八番目か九番目のメロディの良さを愛することのできる境地に達していようかと言っているのである。3092《衰荷》の「無人解愛蕭條境，更遶衰叢一匝看」〔人の解く蕭条たる境を愛する無し、更に衰叢を遶ること一匝にして看ん〕は、人とは異なり、秋になって枯れ始めた蓮の寂しい眺めに風情を感ずることのできる境地に達している作者は、枯れ始めた蓮の周りをもう一度回ってみるのである。3318《宅西有流水。牆下構小樓，臨翫之時，頗有幽趣。因命歌酒，聊以自娛獨醉獨吟偶題五絶》其一の「伊水分來不自由，無人解愛為誰流。家家拋向牆根底，唯我栽蓮起小樓」〔伊水の分かれ来るは自らに由らざるも、人の解く誰が為に流るるかを愛する無し。家家　牆根底に拋つ、唯だ我のみ蓮を栽え　小楼を起つ〕。たまたま伊水が本流から枝分かれして、我が家の方へ流れてくるようになった。近所ではこれを邪魔者扱いする人が多いが、私はその用水を楽しもうと、蓮を植え小楼を建てた。第２句は直訳すれば、「だれのために流れているのかを愛することのできる人はいない」となるが、平たく言えば、わざわざ我が家の方に流れてきてくれたことをありがたく思い、その水をいとおしく思うといった意味だろう。

白居易の言う「愛することができる」ということの意味を理解する上で参考になるのが、以下に挙げる２例である。0103《和答詩十首 幷序 其三 答桐花詩》の「山木多蓊鬱，茲桐獨亭亭。（中略）行者多商賈，居者悉黎氓。無人解賞愛，有客獨屏營」〔山木　多く蓊鬱たり、茲の桐のみ独り亭亭たり。（中略）行く者は多く商賈にして、居る者は悉く黎氓。人の解く賞愛する無きも、客有り　独り屏営す〕。山中にポツンと一本、高くそびえる桐の木があるが、そこを通りかかるのはたいてい商人で、住んでいるのは一般庶民である。誰もこの木を「賞愛」することのできる者はいない。そのような中で、ある旅人がそこを行きつ戻りつしている。この作品は「賞(め)で愛する」の方向で表現されたものである。次に、上引の3318に似た言い回しの見られる0630《下邽莊南桃花》の「村南無限桃花發，唯我多情獨自來。日暮風吹紅滿地，無人解惜為誰開」〔村南　限り無く桃花発き、唯だ我のみ多情にして独自(ひとり)来る。日暮　風吹き　紅　地に満つるも、人の解く誰が為に開くかを惜しむ無し〕。せっかく満開になった桃の花なのに、夕方から吹き出した風で、地面を覆いつくすほどに花びらが散ってしまった。末句は直訳すれば、誰のために咲いてくれたのかを惜しむことのできる者はいないとなるが、「解惜為誰開」は、

4「中徽」は七弦琴上の音節を標示する13か所の印のうちの一つ。

平たく言えば、わざわざ咲いてくれたのだと受け止められるくらいに、花を愛惜することのできる境地に達しているという意味合いだろう[5]。これは「愛惜する」の方向で表現されたものである。

これらの例と考え合わせてみると、白居易の言う「愛することができる」は、対象物の情趣を理解して、いとおしむ、大事にする、めでる等の意味合いであることが分かってくる。また、3385《憑李睦州訪徐凝山人》の「解憐徐處士，唯有李郎中」〔解く徐処士を憐れむは、唯だ李郎中有るのみ〕では、「憐」の字が使われているが、この場合の「憐」も「愛」に近く、「喜爱，疼爱」の意味[6]だろう。隠遁者の徐凝山人を愛することのできるのは、あなた、李郎中殿だけだという意味で理解することができる。

その他、「愁」うることが「解」で表現された例も二つあり、その一つは0759《山枇杷花二首》で、詩句は次の通り。「萬重青嶂蜀門口，一樹紅花山頂頭。春盡憶家歸未得，低紅如解替君愁」〔萬重の青嶂　蜀門口、一樹の紅花　山頂頭。春尽き　家を憶ふも　帰ること未だ得ず、紅を低れ　解く君に替はりて愁ふるが如し〕。山頂に立つ一本の山枇杷の木が、その赤い花びらを垂らしているのは、家が恋しくても帰ることのできない旅人の気持ちを思いやって愁えることができているようだということ。これは上述の、動植物が人間並みの能力を有していることの表現の例としても取り上げることのできるものである。もう一つは、2632《冬夜聞蟲》の「蟲聲冬思苦於秋，不解愁人聞亦愁」〔虫声冬思　秋よりも苦しく、愁ふる解はざる人も　聞けば亦愁へん〕（これは「愁ひを解せざる」と読んだ方が分かりやすいかもしれない）。また、3418《賣駱馬》の「項籍顧騅猶解歎，樂天別駱豈無情」〔項籍すら騅を顧みて猶ほ解く歎ず、楽天　駱と別るるに豈に情無からんや〕は、愛馬との別れに際し嘆息することのできることを「解」で表現している。

以上の用例を通覧してみると、本稿冒頭で「解」字の「…できる」の意味の拠り所と位置付けた「分かる、理解する」の意味が、自然と想起されてくるのではないだろうか。つまり、「解」は、対象物の情趣を理解したうえで、それに愛着を持つという、やや高次の精神的境地を一つの能力として表現する際に、相性のいい助動詞であるように思われるのである。

---

5 第４句を諸田龍美は《白居易「風情」考――「一篇の長恨　風情有り」の真義について―》（『九州中国学会報』36、1998年）》p.11で「人の解く惜しむ無きに誰が為にか開く」と読み、下定雅弘は《杜甫と白居易――その「独善」と共生思想―》（インターネット上に公開）p.13で「それを惜しむ人もいない、花はいったい誰の為に開いたのか」と訳している。これらの読み方もあり得ると思う。この読み方を応用すれば、上掲の3318中の句は「人の解く愛する無きに誰が為にか流るる」となる。

6『漢語大詞典』第７巻741頁。

3.「解」と「多情」

ところで、白居易は人間や動植物だけではなく、春になって不要になった炉（火鉢）との別れまでつらく悲しいと言って、「誰能共天語，長遣四時寒」〔誰か能く天と共に語り[7]、長く四時をして寒からしめん〕（2395《別春爐》）とまで詠んだ人である。彼はそのような繊細な感受性を持つことを人間の品格として相当に重視し、それを「多情」という言葉で表現した。

中国文学史上、「多情」は白居易に至って突出して多用されるようになり、重視されるようになった語であり、この語をめぐっては、保苅佳昭・櫻田芳樹・諸田龍美の各氏らにより、様々な分析・論述がなされている[8]。いずれも有益な指摘に満ちているが、ひとまず白居易における「多情」をコンパクトに理解する助けになる叙述として、諸田論文の一節を引用しておきたい。―「『白氏文集』における「多情」の用例は、総計十八を数える。これはその総詩数を考慮しても顕著に多い数字である。白氏以前にはこの詩語を多用する詩人は見あたらず、従って詩語「多情」が白居易の個性を知る関鍵語の一つであることは容易に推察できる。（中略）「多情」の語義[9]は、常人が無関心な事象にも多感に情の動く鋭敏な感性を有すること、と定義できそうである。（中略）「多情」とは、人が真に詩人であるための必須条件に他ならない。…」[10]

さて、上引の0630《下邽莊南桃花》には、「多情」の語が使われていた。詩の内容に基づいて、理屈っぽくとらえれば、ほとんど散ってしまって見る影もなくなりそうな桃の花をも愛しく思い、見に出かけるだけの感受性がすなわち「多情」ということになるだろうが、本節で挙げてきた「解」の字を含む詩句は、「多情」の語は使われていなくとも、実質的にはみな、その時々に高まった、作者もしくは作者の詠作の対象となった人の心のうちに想定される同様の感受性が表現されたものだったと言っていいだろう。

「解」という助動詞は、白居易の「多情」表現を言語運用の面から下支えする働きを担っていたと見ることができるのではないだろうか。

---

7 あるいは「天に語（つ）げ」か。

8 保苅佳昭《唐に至るまでの詩に見られる「多情」の語について――蘇東坡の詞の「多情」の語を考察するために――》、『商学集志　人文科学編』第22巻第３号、1991年。櫻田芳樹《「情」の語義の展開と詩語「多情」の成立について》、『北陸大学紀要』第23号、1999年。諸田龍美《多情と物のあわれ――白居易と宣長の共鳴――》、『愛媛大学法文学部論集　人文科学編』№9、2000年。

9 文脈から見ると、「多情」の一般的な語義ではなく、白居易がこの語を用いる際の語義の謂いである。

10 前掲『愛媛大学法文学部論集　人文科学編』№9のp.39，41。

4.『全唐詩』に見る「解愛」「解惜」「解憐」「解愁」等の用例

最後に、以上のような白居易の「解」字使用は、通時的に眺めると、どのようにとらえられるか、検討してみたい。本来なら、少なくとも「…できる」の意味の「解」使用が認められる晉代（前述）の資料から検討すべきだろうが、とりあえず簡便に『全唐詩』に見える「解愛」「解惜」「解憐」「解愁」の用例を通して、唐代の範囲だけで行うことを許していただきたい。

「解愛」は、白居易より前に３例あり、白居易より後にはない。盧照鄰の《失群雁》「唯有莊周解愛鳴」〔唯だ莊周の解く鳴くを愛する有るのみ〕（『全唐詩』巻41）は、同じく「雁（鴈）」の字でもガチョウを指すとされる『莊子』山木篇所載の次のような故事を踏まえているというのが、諸家[11]の一致した見解である。それは〈我が家に泊まってくれた莊周一行をもてなすためガチョウを一羽潰（つぶ）すことにした、莊周の旧友が、召使によく鳴くガチョウと鳴けないガチョウと、どちらを潰しましょうかと聞かれ、鳴けない方が潰されることになった〉という故事[12]で、『莊子』本来の趣旨は、これを使い道がないために伐採されずに済んだ大木の話とセットにして、いわゆる「材不在」の間の処世を説くところにあるのだが、盧照鄰は承知の上でのことだろうが、莊周だけがよく鳴く雁を好むことができたと短絡して表現しているわけである。岑参の《范公叢竹歌》「世人見竹不解愛」〔世人は竹を見るも　愛する解はず〕（同前巻199）は、竹を愛する趣味を持っていない、その境地に達していないということで、白居易の使い方に通じるものがある。郎士元の《送張光歸吳》の「解愛鱸魚能幾人」〔解く鱸魚を愛する　能く幾人ならん〕（同前巻248）[13]は、故郷を懐かしみ帰郷することの大切さが分かっている人はどれだけいようかということで、これも白居易の使い方に通じるものがある。

「解惜」は、白居易より前に４例、白居易より後に２例。駱賓王《秋晨同淄川毛司馬秋九詠》中の《秋螢》の「下帷如不倦，当解惜餘光」〔帷を下ろし　倦まざるが如し、当に餘光を惜しむを解すべし〕（同前巻78）は、帳を下ろして勉強に余念がないようだから、雪の明かりで精励したという車胤の勉学態度を理解しているに違いないというも

---

11 范之麟・呉庚舜『全唐詩典故辞典』上冊（湖北辞書出版社、1989年）p.790、祝尚書箋注『盧照鄰集箋注』（上海古籍出版社、1994年）p.75、李雲逸校注『盧照鄰集校注』（中華書局、1998年）p.72、陳貽焮主編『増訂注釈全唐詩』第１冊（文化藝術出版社、2001年）p.247。

12『莊子』山木篇の原文は下記の通り。―（莊子）舍於故人之家。故人喜，命豎子殺鴈而亨之。豎子請曰：「其一能鳴，其一能不鳴。請奚殺。」主人曰：「殺不能鳴者。」

13 ちなみに、この「能」の用法としては上記の「⑤表示估计」が当てはまる。

の。劉長卿の《獄中聞收東京有赦》の「恩波自解惜枯鱗」〔恩波　自ら枯鱗を惜しむを解せん〕（同前巻151）は、このたび恩赦を行われる帝王は当然、苦境にいる者を大事に扱うということが分かっていらっしゃるだろうということ。李嘉佑の《春日淇上作》の「相將踏青去，不解惜羅衣」〔相将て踏青に去き、羅衣を惜しむを解せず〕（同前巻206）は、着飾った女の子と裕福なお坊ちゃんがピクニックに出かけ、双方とも身に着けている上等の衣服が汚れるのも気にしないというもの。李益の《惜春傷同幕故人孟郎中，兼呈去年看花友》は五言絶句で、「畏老身今老，逢春解惜春。今年看花伴，已少去年人」〔老いを畏るるも　身今老い、春に逢へば　春を惜しむを解す。今年　花を看る伴、已に少なし　去年の人〕（同前巻283）がその全体である。前半だけ解釈すると、老いというものを恐れていたが、今や自分自身老いを迎え、春を迎えると、春をいとおしみ惜しむということが分かるようになったというもの。白居易より後の許棠の《長安書情》の「近來驚白髮，方解惜青春」〔近来　白髪に驚き、方て青春を惜しむを解す〕（同前巻604）は、李益の詩想に通じるが、惜しむのが「青春」だから、残された年齢とか、大切な時間とかの意味も込められているだろう。鄭谷の《為人題》の「淚濕孤鸞曉曉鏡昏，近來方解惜青春」〔涙　孤鸞の暁鏡を湿して昏く、近来方て青春を惜しむを解す〕（同前巻675）は、許棠の作と同旨である。

「理解する」の意の動詞と見たほうが理解しやすいものが多く、それらは「解す」と読んでみたが、時期的に白居易と前後する後の方の３例は、解する対象が情緒である点で、白居易の使い方と通じるものがある。違いは、そのような情緒を理解することに白居易が一つの能力として積極的な価値を付与するような表現をしているのに対し、この３例には必ずしもそこまでの積極性が感じられない点である。

「解憐」の用例は白居易より前には見られず、後には３例ある。徐凝（792?-853）の《題開元寺牡丹》の「海燕解憐頻睥睨，胡蜂未識更徘徊」〔海燕は解く憐みて　頻りに睥睨し、胡蜂は未だ識らずして　更に徘徊す〕（同前巻474）は、珍しく開元寺に植えられた牡丹を、燕はその美しさが分かるのか、気になって何度も視線を注ぎ、蜂も見たことのない花なので何度も辺りを飛び回るというもの。司空図の《九月八日》の「已是人間寂寞花，解憐寂寞傍貧家」〔已に是れ人間の寂寞たる花なり、解く憐れむ　寂寞として貧家に傍へるを〕（同前巻633）[14]は、自分はすでにこの世の寂しい花のような老境に至っているので、花（菊だろう）が貧しい我が家沿いに寂しく咲いているのをあわれに思うような

14 本２句の解釈には、これを踏まえたと見られる「我亦人間寂寞花」の句を含む梁川星巌の《路傍殘菊》（『星巌先生遺稿　後編』巻８、1863年）と題する作品の詩境を参考にした。

心のひだを持ち合わせるようになったということだろう。徐鉉の《廬陵別朱觀先輩》の「解憐才子寗唯我」〔解く才子を憐れむ　寗ぞ唯だ我のみならん〕（同前巻755）は、遠方の「卑官」として赴任する朱観を励まし、あなたのような才子を気にかけ大事に思ってあげるのは、僕だけではありませんよということ。

「解愁」は白居易より前に８例見られるが、うち７例は人名の一部や「とく、ほどく」の意味で、ここに取り上げるべきものは盧仝の《守歳二首》其二の「不及兒童日，都盧不解愁」〔児童の日、都盧（まつたく）愁ひを解せざりしに及ばず〕（同前巻387）だけである。年越しの際わくわくする楽しみを味わうことのなくなった作者が、子供のころは全く愁いなんていうものとは無縁でいられたなと振り返っているのである。これも「解す」と解すべきだろう。白居易より後には用例が見当たらず、白居易の用例二つも、うち一つは「とく、ほどく」の意味である。

以上のように見てくると、「解」の字を使うことにより、何物かを愛するとか、惜しむとか、憐れむとか、愁えるとかいった心の働きを積極的な価値のあることとして表現した例として、白居易より前に確認できるのは、せいぜい岑参（715-770）や郎士元（727-780）の詩句程度である。強いて言えば、「解憐」の三つの用例は、積極性とは無縁そうな「あわれむ」という感情に「解」をかぶせて表現している点で、白居易に通じるものがあり、多少注目に値する。中でも、燕についてそのような表現をしている徐凝は白居易と交遊関係のあった人で、何らかの影響関係を想定してもいいかもしれない。

おわりに

以上、本稿では白居易の詩における、「…できる」の意味の「解」の字の意味・用法について検討した。その結果、明らかになったのは、巨視的には同義語と言える「能」と比較してみて、「解」の方が意味の領域が狭いが、一方、「能」にはない、特別な用法が備わっていることである。それは、対象物に対して情趣を感じることができることを言う時に使われるものだった。唐代の他の作品を検してみると、「解」の字を使って「愛する」とか、「惜しむ」とか、「憐れむ」とか、「愁える」とかいったことを一つの能力として表現しようとするものはあまり見当たらない。これは少なくとも唐代に関する限り、様々な事物に対し繊細な感受性をもって対することを信条としていた白居易にのみ顕著にみられる言語現象だったと判断してもいいかもしれない。白居易は、一般人よりも一段深い感受性を持つことを「多情」という語で表現した。白居易にとって、「解」は「多情」ということを表現するときに相性の良い助動詞（もしくは動詞）だったのだ

ろう。

白居易の作品中には、「解」と「多情」の二語が「…解多情…」という形で組み合わせて使われている詩句が３例見られる。その中の一つ、3142《楊柳枝詞八首》其五の「若解多情尋小小」の句は、従来幾通りかの読み方がなされてきたものである。次稿では、本稿の考察を踏まえ、この句の解釈の可能性について検討し、正解を追求してみたいと考えている。